

香川漆芸美術展 ～その始まりと今～

香川漆芸の祖 玉楮象谷 生誕210周年

# 玉楮象谷

二〇一六年 八月六日(土)～九月十九日(月・祝)





彫漆菊文靴 天保7年(1836)

高松平家歴史資料・当館蔵  
Saddle with chrysanthemum design, lacquer carving. (1836)

30歳の象谷が修復した作品。当時の象谷は、高松藩から「讃岐彫」「讃岐塗」の印を与えられて4年後であり、この頃から藩関係の仕事を重ねて多くの作品を生み出した。この靴は、高松藩の宝蔵に収められていた大坪道禪と伝わるもので、寛永15年(1638)の刻銘がある。箱書き(内箱)から大坪道禪の作品を、象谷が修復したことが分かる。靴は、乗馬のために馬の背に着ける道具。木の表面に漆塗を施した日本伝統の形式で、前輪・後輪と、その間の居木を組み合わせて作られる。

象谷の修復は、全面にわたる。見どころは、香川漆芸の主要技法「彫漆」と「蒔絵」の組み合わせである。前輪・後輪外側は彫漆で文様を彫り、まず朱色と緑色の漆を分厚く交互に塗り重ね、地文の青海波から緑色の葉と茎、紅色の菊花が浮かぶように彫り上げる、「紅花緑葉」と呼ばれる技法が用いられている。カマキリの体と羽根を、紅と緑に彫り分け、菊葉の間を縫って行くような立体感が出ているところも、技法の特性がよく表れていて、面白い。居木や前輪・後輪内側は、黒漆の地を線彫りし、そこに黄色漆を埋め込んで研ぎ仕上げをする蒔絵で埋めつくされる。幾何学文様で縁取られたところに怪獣文や鳥獣文や魚が表され、隙間に草花文や幾何学文で満たされる。

彫漆では立体感あふれる彫刻的な表現が、蒔絵では飽くなく細密表現が追求される。高松平家の宝物では、中世以来の流れをくむ蒔絵の靴が多く、この作品が際立った特色をなしている。



蒔絵鐘 天保10年(1839)

高松平家歴史資料・当館蔵  
Stirrups, kinma. (1839)

この年にも行われた高松藩宝蔵の宝物修復の一つとして、象谷が手がけた。箱書き(内箱)から大坪道禪の作品を、象谷が修復したことが分かる。鐘とは、乗馬の際に足をかける道具である。鉄胎に漆で仕上げがなされており、外面の宝珠形の部分は螺鈿細工となっているが、素材の貝殻の残りが悪く、道禪のオリジナルの可能性もある。それ以外の全面に施された朱色の蒔絵は、象谷の手になるものと思われる。彫漆靴と同様、文様の細密さが目を引くが、特に鳥獣文などの輪郭が地である黒を彫り残して表現されているところに、技巧的な傾向がうかがえる。



いっかくいんろう  
一角印籠 天保10年(1839)

高松平家歴史資料・当館蔵  
国重要美術品  
Medicine case with lotus in the pond design, ikkaku. (1839)

高松藩宝蔵宝物の修復や奥向きでの仕事をこなした同年、藩から北極海の家獣イッカクの牙を提供されて制作・上納したものの。印籠は、薬などを入れ、持ち歩くための容器である。江戸時代の印籠は、表面の仕上げに漆が塗られ、蒔絵や螺鈿などが施されることがしばしばあったが、この作品ではそうした漆芸の手法は見られず、素材の質感を活かした彫りのみで制作された。象谷は父藤川洪隆のもとで印(判子)の篆刻の腕を磨いたとされているが、まさしく象谷の真骨頂が彫りにあることを示す代表作である。

池の中に生える蓮の花と葉が全面に彫られ、それらの上や隙間から見える水中に群がる虫・クモ・カニ・カエル・亀・鳥など生物は、『御用留』によると999匹彫り出されている。『御用留』や印籠の箱書きには、その内訳が誇らしげに列記されている。それらが彫られた印籠は、わずかに高さ8.6cm、幅5.5cm、厚さ2.9cmの大きさであり、「刀法は精緻を極めてい」と評される。

印籠の中に入れる4段重ねの重(犀角製)には、「花中君子」と刻まれている。蓮の花の別名を通して、行いの正しい為政者を示すこの言葉に、藩政改革を進めた依頼主である9代藩主松平頼恕を重ねていたのであろう。



堆朱文箱 弘化2年(1845)

高松平家歴史資料・当館蔵  
Letter case, tsuishu. (1845)

相手宛の書状を入れる箱で、高松藩10代藩主松平頼胤の御用品として制作された。堆朱は彫漆の一技法で、薄塗を何度も繰り返して分厚い板状の朱漆の層を作り、それを彫り込んで作られる。非常に手間のかかる技法である。

この作品では、蓋上面中央の大きく彫り残された部分の鮮やかな朱色と、その周り側面深く彫り込まれたことで生じた陰影に富んだ深い朱色が、対照的に示されている。蓋と身の側面には、青海波を地文(背景)としてそこから浮き上がるように菊花が彫られ、トンボ・チョウ・カマキリ・コオロギ・カタツムリ・カニが配される。身の底面は重ねられた黒漆を彫る堆黒が施され、世を連続させる紗綾形を地文にしている。

蓋上面には葵の葉が規則的に配列され、使用者が示される。一方で、身側面の隅には「象谷」の銘が、身底面中央には「玉椿為式謹造」と篆字が彫られて象谷の作であることが明示される。



ついでくまつがうらこうこう  
**堆黒松ヶ浦香合** 嘉永4年(1851)

重要美術品 当館蔵  
 Incense case, 'Matsugaura', tsuikoku. (1851)

朱漆を塗り重ねた上に黒漆を厚く塗り重ね、それを彫る堆黒の作品。二枚貝と共に『後拾遺和歌集』の「松山の松の浦風吹きよせば拾ひてしのべ恋わすれ貝」の和歌が彫られている。「松の浦」は、讃岐の歌枕。これらの背景には朱漆の層で青海波が表現されている。貝の表面はゆるやかな曲線を描く彫りであるのに対し、その側面はほぼ垂直にすっきりと彫り下げられている。また、青海波の地文は細かい線で描写されており、象谷の幅広い彫りの技が活かされている。

象谷は45歳のときに松平頼胤に命じられ18点の松ヶ浦香合を制作した。現存する作品を比較すると、彫りや文字・図柄の配置はほとんど変わらず、象谷の安定した力量がうかがえる。注文主・頼胤の讃岐婦藩(嘉永3年(1850)6月から翌年5月)に合わせて納めている。



さぬきぼりついでくおきなこうき  
**狭貫彫堆黒翁香器** 嘉永4年(1851)

高松松平家歴史資料・当館蔵  
 Incense case, 'Okina', tsuikoku in sanuki relief. (1851)

香を入れる器(香合)であり、蓋には翁の面を付けて五穀豊穡を祝う「三番叟の舞」が表現される。翁の背景は、上半分に朱の地で霞文が、下半分に黒の地で七宝文が刻まれる。厚く漆を重ねて地をつくる堆黒によって、翁の衣のひだや顔を覆う面の様子が立体的に表現されている。



ついでしゅひちりきばこ  
**堆朱箏築篋** 嘉永4年(1851)

高松市美術館蔵  
 高松市指定有形文化財  
 Hichiriki case with deuzia and peony design, tsuishu. (1851)

京都興正寺門跡からの依頼を受け、弘化4年(1847)冬から3年半を要して制作したもの。雅楽で演奏される管楽器「箏築」を入れるための箱で、蓋と身が下側で金具留めされ扇のように開閉する。外面全体に堆朱が施されており、蓋の中央で余白を残しながら彫られた卯の花と、その周辺と側面で空間を埋め尽くすような牡丹唐草が対照的に彫り出される。いずれも晩春から初夏にかけての花である。蓋の裏面には、「大日本讃岐国玉椿為参謹製(象谷印)」が彫られている。

この年の象谷は、京都興正寺門跡以外に幕閣や諸大名から求められて、制作しており、高松藩主を通じて新たな依頼主とのネットワークが形成されることとなった。



さぬきぼりついでしゅたむけやまこうこう  
**讃岐彫堆朱手向山香盒** 嘉永4年(1851)

高松市美術館蔵 高松市指定有形文化財  
 Incense case with maple design 'Tamukeyama', tsuishu. (1851)

菅原道真の950回忌にあたり、象谷が制作して京都北野天満宮に奉納したもの。深い朱色をなす漆を彫り込んで青海波の地文を作り、楓の葉に道真の歌の冒頭「古能太飛盤」の文字を添えた堆朱の作品である。道真の和歌は、紅葉を神への捧げ物にするという内容。パターン化された地文から明瞭な輪郭をもって浮かび上がる楓の葉は、うねるような面の起伏が写実的で、抽象化されない捧げ物としての形を表す。

黒漆が塗られた身の底面には、金名彫で奉納の趣旨と象谷の名前が刻まれる。



ぞんせいかがみばこ  
**存清鏡篋** 嘉永4年(1851)

圓通寺蔵  
 Case for mirror, zonsei. (1851)

圓通寺(さぬき市志度)の住職周澄の求めに応じ、象谷が所蔵していた古鏡を贈った際に作られた鏡箱。円形の被せ蓋造りで、黒漆を塗った蓋

の上面に七宝文を素彫りして地文となす。その上に朱漆による蓮の花や緑漆による蓮の葉をのびやかに描き、最後に輪郭を線彫りで縁取りし、細部に線彫りを加えている。蓋の側面には、壺葉とされる壺芝（マンネンタケ）を圖案化し、朱と緑で描いた後、輪郭と細部を線彫りする。

巧みな構図とあいまって、漆で描いた部分を線彫りで仕上げる存清の技法が効果的に表れた美しい作品である。彫漆・蒔髹に共通する彫り技法が駆使されており、象谷の面目躍如たる代表作といえよう。



ついでつづみばこ  
**堆朱鼓箱** 嘉永6年(1853)

松平家歴史資料・当館保管  
国重要美術品

Tsuzumi box peony and chrysanthemum design, two tiers relief, tsuishu. (1853)

素地(木箱)に重ね塗りされた分厚い朱漆を彫る堆朱の鼓箱。高松藩の絵師狩野親信の下絵(No28)をもとに制作が行われた。蓋の表面中央には、高松松平家の三葵紋がひときわ明瞭に彫り出されているが、その他は全面にわたって細密な彫りが隙間なく施されている。上層に牡丹、下層に菊が配置される構図で、それを彫りの深さを変えて二重彫りし、一部を三重とすることで、立体的に入り組んだ文様構成に仕上げている。これら密生した草花に、蝶が舞う。花や葉の端がめくれ上がるような細部表現で、さらなる立体感が表されるが、一方でそれらの多用によって多少技巧的な要素が強く出ているようにも見受けられる。蝶も身側面での表現はパターン化されたような感がある。

象谷はこの時47歳。この頃は作品も多作で、円熟の域に達した感があり、執拗なまでの彫りへのこだわりが見られる。



かのうちかのぶ えいしゅう つづみこしたえ  
**狩野親信(永笑) 鼓箱下絵** 嘉永5年(1852)

高松市指定有形文化財 高松市美術館蔵

Kano, Chikanobu/Underdrawing for Tsuzumi box. (1852)

高松藩絵師狩野親信(永笑)による、堆朱鼓箱の下絵。二重彫りの作品となることを下絵の段階で意識したのか、上層部を濃く、下層部を薄く描いている。鼓箱と比較すると、大まかな菊や牡丹、蝶の配置は同じであるが、細部には違いが見られる。



さいしききんまみずさしだな  
**彩色蒔髹水指棚** 嘉永6年(1853)

高松市指定有形文化財 高松市美術館蔵

Shelved cabinet for water jar, kinma on coloring lacquer. (1853)

茶道具の水指を置くための棚。『御用留』に、彦根藩主・井伊直弼からの求めで制作したことが記されており、象谷の名が全国的に知られていたことが推測できる。

また『御用留』には、この作品が初めて制作した彩色蒔髹であったことも記載されている。彩色蒔髹は漆を塗ったうえで、線彫りを施し、そこに多色の色漆を埋める技法である。初めての制作ながら、整然と並ぶ文様などは、それを感じさせない仕上がりとなっている。象谷は南方渡来の漆器に用いられた技を学び取り、自らの技としているが、ここに至るまでの試行錯誤があったのだろう。



りょうしすずみばこ  
**彩色蒔髹料紙硯箱** 嘉永7年(1854)

重要美術品 当館蔵

Writing-paper and writing box, kinma on coloring lacquer. (1854)

当時48歳の象谷が、高松藩主・松平頼胤に献上した品。箱書きおよび『御用留』から、安政元年(1854)12月24日に納めていることが分かる。

竹を編んで作った素地に漆を塗って作った籃胎漆器である。籃胎は、タイやミャンマーにおいて用いられ、象谷は南方渡来の漆器を通じてこの技を習得した。

そして、籃胎の上には蒔髹によって加飾が施されている。左右・上下対象のデザインには、獅子や鳳凰、蝙蝠があしらわれている。蓋表の朱の唐草文の地文の細かさや、側面の七宝繋ぎ文の間に配された花文の均一さなどから正確な彫りの技術と象谷の制作への真摯な姿勢がうかがえる。

料紙箱・硯箱のいずれの側面にも「築只園主人象谷造」「嘉永七年甲寅冬日」の文字が蒔髹にて刻銘されている。



こうかりはくようせんこう  
**紅花緑葉饅盒**

当館蔵  
Confectionery container with phoenix and Chinese parasol tree design.

食べ物を入れる饅盒に紅花緑葉で加飾する。大きく分けて朱、黄、緑、朱の4層から構成されている。鳳凰や側面の花は朱、葉は緑もしくは黄色で表している。葉の根元や花卉の端に表現された渦状の文様が特徴的である。



ごようどめ  
**御用留**

文政13年(1830)～安政6年(1859)  
高松市指定有形文化財 高松市美術館蔵  
Memorandum of works. (1853-1859)

象谷が24歳のころから53歳までの活動について記されている。高松藩をはじめ他藩の藩主などへ納めた品、藩の宝蔵の管理、修繕について主に記載されている。異国船来航や大地震についても記録しており、象谷が生きた時代を知ることができる史料である。また、裏面から書かれた記事には、社寺から依頼のあった制作や私事が記され、東本願寺の学僧雲華を通じて目にした唐物漆器と比べて自分の作品が下手であると苦惱する象谷の姿も垣間見える。



ぞうこくしょじいん  
**象谷所持印**

高松市指定有形文化財 高松市美術館蔵  
Zōkoku's seals.

象谷が使用した印22種のほか、息子・雪堂と藤樹の印各1つが同じ箱に納められている。石印や銅印、骨印といった様々な素材で作られており、そのサイズや形態も多様である。これらの印がどの作品に使用されたかなどは不明である。



せきいんにか  
**石印二顆** 嘉永3年(1850)

高松市指定有形文化財 高松市美術館蔵  
Two seals. (1850)

「紅花緑葉堂」「象谷」と彫られた石印。『御用留』によると、山田梅村を通じて銭少虎は、1対の聯(対句を書き、柱にかける札)を象谷に贈り、象谷は漆硯を返礼の品とした。それに対して少虎は、嘉永3年(1850)に石印を贈っている。

「象」を図様化した印は、「堆黒松ヶ浦香合」をはじめ、「堆朱筆築箱」「讃岐彫堆朱手向山香合」などの箱に押されている。

現在は、少虎から贈られた石印2点と水晶に彫られた印1点が同じ箱に納められている。

### 玉楮象谷略歴

江戸後期、高松藩の漆工。文化3年(1806)～明治2年(1869)讃岐漆芸の祖。父藤川洪隆は鞘塗師で、篆刻と細字を得意とした。京都の陶工永楽保全が内外古今の珍器を所蔵していると聞き、保全を訪ねて親交を深めた。保全の仲介で東本願寺の学僧雲華(大合)や、大徳寺黄梅院の大綱宗玄と親交を結び、これらに伝来していた堆朱、堆黒など唐物漆器をつぶさに見る機会を得た。保全が古陶磁を写して永楽焼を創始したように、象谷もまた唐物漆器や南方渡来の籃胎漆器を模して独自の作風を確立し、父から受け継いだ篆刻の技術をふるい、彫漆、蒟醬、存清(存星)の三技法を創始した。彫漆は、色漆を厚く塗り重ね、文様を彫り表す技法。蒟醬は、剣と称する彫刻刀で文様を彫り、その彫り口に色漆を埋め、平らに研ぎ出すもの。存清は、色漆で文様を描き、輪郭や細部に線彫りを加える手法である。また籃胎は、竹ヒゴで籠状に編んだ素地である。

文政13年(1830)藩に菓子盆を差し出し、天保3年(1832)「讃岐彫」「讃岐塗」の印を拝領。天保6年帯刀御免となる。翌7年宝蔵品の手入れを命じられ、彫漆菊文鞍を献上。天保10年わずか8センチ余りのイッカク材の印籠に、蓮の葉や花、太湖石に虫類、鳥類など999の生類を彫った一角印籠を九代藩主松平頼愨に献上。その技量を認められ、玉楮の姓を賜ったと伝えられる。嘉永4年(1851)十代藩主松平頼胤の命により、堆黒松ヶ浦香合18合を製作。参勤交代の江戸土産となる。頼胤は彦根藩主井伊直弼とは旧知の間柄で、同じ江戸城溜間の定席であった。頼胤が藩主であった時代、親藩・譜代の有力な諸大名への進物を通して、象谷の名声は広く世に広まった。また興正寺門跡より注文の堆朱筆築箱、北野天満宮950年忌祭に奉納した讃岐彫堆朱手向山香合、志度圓通寺へ奉納した存清鏡篋など、神社仏閣の求めに応じて製作した。嘉永6年堆朱鏡篋を上納。藩主頼胤は、井伊直弼より注文の彩色蒟醬水指糊など進物の品々を船に乗せ再び参勤の途につくが、直後ペリーが浦賀に来航、その後帰藩は許されなかった。安政元年(1854)彩色蒟醬料紙硯箱を上納。安政5年井伊直弼が大老に就任。引き続き十四代將軍家茂への献上品や有力大名への進物の制作を命じられたが、万延元年(1860)桜田門外の変で直弼が暗殺された後は、藩主頼胤が隠居し、象谷もほどなく引退したようである。制作した品々の手控えである「御用留」を遺している。

赤字は出品作品。

香川漆芸の祖 玉楮象谷 生誕210周年  
香川漆芸美術展～その始まりと今～

番号	作品名	作者・製作地	制作年	寸法(縦×横×高cm)	所蔵	指定	備考
1	彫漆菊文鞍	玉楮 象谷	天保7 (1836)	36.4×41.7×27.2	高松松平家歴史資料・当館保管		
2	蒟醬燈	玉楮 象谷	天保10 (1839)	30.3×14.8×27.5	高松松平家歴史資料・当館保管		
3	一角印籠	玉楮 象谷	天保10 (1839)	2.9×5.5×8.6	当館	重要美術品(国)	
4	堆朱文箱	玉楮 象谷	弘化2 (1845)	7.2×22.7×5.1	当館		
5	存清鏡篋	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	径41.1×高5.3	圓通寺		
6	讃岐彫堆朱 手向山香盒	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	径7.7×高2.6	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
7	堆朱 篋篋	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	33.0×4.2×4.2	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
8	狭貴彫堆黒 翁香器	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	径8.6×高2.6	当館		
9	堆黒松ヶ浦香合	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	径8.6×高2.5	当館	重要美術品(国)	
10	堆黒松ヶ浦香合	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	径8.6×高2.4	当館	重要美術品(国)	
11	堆黒松ヶ浦香合	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	径8.7×高2.2	当館	重要美術品(国)	
12	堆黒松ヶ浦香合	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	径8.6×高2.4	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
13	堆黒松ヶ浦香合	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	径8.6×高2.4	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
14	堆黒松ヶ浦香合	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	径8.6×高2.4	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
15	堆黒松ヶ浦香合	玉楮 象谷	嘉永4 (1851)	径8.6×高2.4	個人		
16	堆朱鼓箱	玉楮 象谷	嘉永6 (1853)	28.8×46.0×24.0	高松松平家歴史資料	重要美術品(国)	
17	鼓箱下絵	狩野 親信(永笑)	嘉永5 (1852)	93.4×110.3 (28.8×46.0、24.0×46.0 2枚、28.8×24.0 2枚)	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
18	彩色蒟醬水指棚	玉楮 象谷	嘉永6 (1853)	29.1×32.1×52.0	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
19	彩色蒟醬料紙硯箱	玉楮 象谷	嘉永7 (1854)	(料紙箱) 40.0×31.1×11.1 (硯箱) 26.5×20.5×6.2	当館	重要美術品(国)	
20	紅花緑葉饅盒	玉楮 象谷	-	径21.6×高12.6	当館		
21	御用留	玉楮 象谷	文政13 (1830) ～安政6 (1859)	19.2×8.21×厚1.1	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
22	石印 二顆 紅花緑葉堂 象谷	銭 少虎	嘉永3 (1850)	(紅花緑葉堂) 2.0×2.0×6.0 (象谷) 2.0×2.0×5.8	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
23	象谷所持印	玉楮 象谷	-	高0.8～5.0 13点	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
24	漆彫物控	玉楮 象谷	-	27.5×21.0×厚0.8	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
25	法図控	玉楮 象谷	-	28.0×21.9×厚0.8	高松市美術館	高松市指定有形文化財	
26	蒟醬懸子付盒子	ミャンマー製	-	径21.0×高11.0	高松市美術館		
27	金馬菓子入	タイ製	-	12.8×20.5×12.0	香川県漆芸研究所		
28	金馬塗 茶箱	タイ製	室町時代	10.5×15.5×9.0	高松市美術館		
29	木無滴 飯篋	タイ製	室町時代	14.4×24.4×13.0	高松市美術館		旧益田鈍翁コレクション
30	存星唐児遊 香合	中国製	明時代	径11.2×高3.5	高松市美術館		
31	堆朱四角 牡丹唐鳥 盆	中国製	元末期 明初期	22.6×22.9×2.5	高松市美術館		桜御殿(柳宮御物)

香川漆芸美術展～その始まりと今～  
玉楮象谷 Zokoku Tamakaji

平成28年8月6日(土)～9月19日(月・祝)  
香川県立ミュージアム 常設展示室4・5

監修 住谷晃一郎(香川県文化振興課美術コーディネーター)  
解説 住谷晃一郎・鹿間 里奈  
写真 高橋 章(No.3～11・17～23)  
デザイン 高橋 一夫  
協力 公益財団法人松平公益会  
発行日 2016年8月  
編集・発行 香川県立ミュージアム  
表紙 彩色蒟醬料紙硯箱

The Kagawa Museum

香川県立ミュージアム

〒760-0030 香川県高松市玉藻町5番5号  
TEL.087-822-0002(代表)  
http://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/



【交通案内】

- JR高松駅から東へ900m
- ことでん高松築港駅から東へ800m
- ことでん片原町駅から北へ500m
- ことでんバス「県民ホール前」から南へ200m
- 岡山・愛媛・高知方面から…高松自動車道 高松西ICより車で約30分
- 徳島方面から…高松自動車道 高松中央ICより車で約25分
- 高松空港から…JR高松駅までリムジンバスで35分
- 【駐車場】
- 当館地下駐車場(50台・有料) / 香川県玉藻町駐車場(有料)

